シャーロット・ブロンテ初期作品研究（4）

── ヒーロー像の造形とテーマの形成 ──

岩　上　は　る　子

(1992年6月29日受理)

序

本稿は「シャーロット・ブロンテ初期作品研究」(2)(3)で取り上げたヒロイン像に続いて，ヒーロー像を分析し，初期作品に現れたシャーロットの愛の特質および恋愛物語のもつ意味について考察しようとするものである。あわせてこれまで触れていなかった作品も取り上げ，初期作品の全体像の概括を目的とした本研究の締めくくりとしたいと考える。

シャーロットが14歳から23歳にかけて書き続けた初期作品群の主人公は Arthur Wellesley すなわち Marquis of Douro で，後に Duke of Zamorna から Emperor Adrian へと変わる一人の男性であった。先に論じたヒロインたちが，この主人公をめぐって恋愛物語を織りなしている。彼女たちの容姿，性格，境遇は個性的に描かれているが，共通項はいずれもザモーナ公爵に魅せられ，彼への愛を生の拠りどころとしていたことである。ザモーナ公爵は彼女たちの人生のすべてであり，彼への愛に生きることが彼女たちの生を意味づけていた。言葉を変えれば，彼女たちの存在はザモーナ公爵に依拠し，彼の存在に従属しているのである。

物語を導くのはヒーローで，ヒロインたちは彼らの人生のそれぞれの局面を飾るために現れる。物語のなかでは，彼女たちが変化し成長する姿よりも，設定された状況での印象的な姿をとらえることに重点がおかれている。激しい恋にとらわれるさま，報いられない恋に耐える孤独，愛の不安になやむ姿の形象がくり返し描かれている。彼女たちはザモーナ公爵を中心点に放射状に置かれ，加えてヒロインたちの相互の関連性が失われたところに位置させられていた。したがって彼との愛を失った状態におかれたとき，彼女たちは孤立し自己の内に沈潜するしかなかった。

先に見たように初期作品の恋愛物語は，その多くが悲恋に終っている。そこに描かれるのは愛の歓びというより，むしろヒロインたちの愛への憧憬や満たされない愛の苦しみである。作中の愛は片務的で，ヒロインは一方的に犠牲的献身を強いる形であらわれ，ヒーローは多くの女性たちに愛

を捧げられながらも，その愛に報いることを知らない。この愛の非対称の基底にあるのは，ヒロインにとって愛はその生のすべてであるのに対して，ヒーローのばあい愛は必ずしも生の拠りどころとはなっていないことである。

ヒロインの造形の中核が，愛に生きる女性の姿を描くことにあったとすれば，ヒーロー像の中心理念は何であったのだろうか。物語は，既成の道徳や因襲にとらわれず，自分の情熱の赴くままに生きるザモーナ公爵を主人公として展開し，その彼に報いられることのない愛を捧げるヒロインたちの悲劇的な姿を映し出す。ヒロインたちに対して強烈な求心力を放つザモーナ公爵の魅力とは何なのか，またそれがどのように形成されていったのかを追究することが本論の主要なテーマである。以下では，ザモーナ公爵を中心として，彼の父ウェリントン公爵，義父となるノーザンガーランド伯爵などを取り上げ，シャーロットの男性像の特徴とその問題点を明らかにしたい。

(一) グラスタウン物語：ウェリントン公爵にみるヒーロー像

ウェリントン公爵は，子供たちが最初に作り出したグラスタウン物語の主人公である。拙論「シャーロット・ブロンテ初期作品研究」(1)で紹介したように，武将のウェリントン公爵を主人公とするこの物語群は，多くが探検，政治，戦争などを主題とした，女性人物がほとんど登場しない男性的な世界である。物語の起こりから，ウェリントン公爵の造形，その英雄像などについて見てみたい。

10歳のシャーロットをリーダーに4人の子供たちが，父の土産の兵隊人形から物語作りを開始した時の模様は，次の一節によってあまりにも有名である。

> Papa bought Branwell some soldiers from Leeds. When Papa came home it was night and we were in bed, so next morning Branwell came to our door with a box of soldiers. Emily and I jumped out of bed and I snatched up one and exclaimed, 'This is the Duke of Wellington ! It shall be mine !' When I said this, Emily likewise took one and said it should be hers. When Anne came down she took one also. Mine was the prettiest of the whole and perfect in every part. Emily's was a grave-looking fellow. We called him 'Gravey'. Anne's was a queer little thing, very much like herself. He was called 'Waiting Boy'. Branwell chose 'Bonaparte'.[1]

おなじみの場面だが，ここで改めて確認したいのは，子供たちの物語が「これはウェリントン公爵よ！わたしのはこれにするわ！」というシャーロットの歓声で始まったという点である。はじめにウェリントン公爵があり，後にその敵役としてナポレオンが指名された。ブランウェルの主人公は

その後しばしば入れ代ったのに対して，グラスタウン物語時代のシャーロットは，終始ウェリントン公爵を自分の物語の主人公として使い続けている。

物語を最終的に支配するのは，常にウェリントン公爵と決まっていた。[2] シャーロットの生まれる前年の1815年にワーテルローでナポレオンを破った公爵は，イギリスの国民的な英雄となった。ブロンテ家においても子供たちばかりでなく，父ブロンテ師も崇拝する愛国者であった。牧師館の裏庭でピストルを撃ち鳴らすこともあったというブロンテ師は，シャーロットの親友エレン・ナッシが語っているように，おそらく聖職者であるよりも軍人に向いていたのかも知れない。[3] ケンブリッジ時代にはウェリントンの戦歴に深い関心を示し，また詩集 *The Maid of Killarney* (1818) においても，登場人物の口を借りて，優れた軍略家としての公爵に賛辞を送っている。[4] ブロンテ師にとってウェリントン公爵は，自分の果たしえなかった軍人としての英雄的生涯の夢を体現してくれる人間であったのだろう。

こうした父のウェリントン崇拝は子供たち，とりわけシャーロットに最も強く受け継がれる。彼女のウェリントン熱とも呼びたいような熱狂ぶりには，たんなるヒロイックなものへの憧れ以上のものが感じられる。そこには父と共通の英雄を崇拝することで得られる，父との連帯感に似たものもあったのではないかと思われる。父と弟を中心とした世界に入るためには，彼らと同じ関心をもち共感することが必要であった。[5] そうした意味でウェリントン公爵を主人公とした一連のグラスタウン物語は，シャーロットを中心とする子供たちによる〈父親探し〉の物語としての一面をもつといえよう。

グラスタウン物語の 'Young Men's Play' におけるウェリントン公爵は，はじめは Arthur Wellesley の名（これも実在のウェリントン公爵の名をとっている）で，Invincible 号と名付けられた船に乗りくんだ Twelve Adventurers の一人として登場し，後に守り神からウェリントン公爵の称号を与えられ，植民地のリーダーとして敵と戦い，やがてグレイト・グラスタウンと名付けられた王国の君主として君臨し，政治力を発揮するようになる。また一方の 'Islander's Play' においては，ウェリントン公爵の辣腕ぶりはカトリック解放令やアイルランド問題をはじめ，内閣解散や総選挙といった政治的事件など，実際の公爵の活動に直接的に取材して描かれるようになる。シャーロットはそれらの知識を，新聞や雑誌あるいは父の蔵書などから得たのであろう。[6] ウェリントン公爵の公私にわたる様々な出来事に強い関心を寄せ，理想化した姿で自作に登場させている。

物語の主要人物の容姿と性格を紹介した 'Characters of the Celebrated Men of the Present Time' (12.1829) では，シャーロットはスコットにならって，公爵の姿を次のように描いている。

> in short, the whole contour of his features were exactly what I should have wished for in the hero of Waterloo, conqueror of Buonaparte. ・・・ In his disposition he is decisive, calm, courageous

and noble-minded. ・・・ All his conduct was calculated to inspire confidence into the minds of his soldiers and to make them more resolute in the defence of their king and country.[7]

秀でた額，高い鼻梁，引き締まった口元といった顔立ちの，そして決然として勇敢で気品にあふれ，部下たちの信頼厚く，愛国心を奮い立たせる強力な指導者としての姿がそこにある。物語においては，公爵はどのような難局にあっても挫けず，ときに超人的な力を発揮して問題を解決する。優れた軍人，政治家としてのウェリントン公爵は，家庭にあっても頼もしい父親――窮地に陥った子供たちを救い出すエピソードがいくつか見られる――である。こうした家父長的な英雄像は，大きくはこの時代の理想像であり，それゆえ英国民の，そしてブロンテ師の賞賛する英雄となりえたのであろう。

グラスタウン物語において，架空の王国や島々を舞台に活躍するのはウェリントン公爵をはじめとした実在の人物たちであったが，その物語世界は童話性をもつ子供の虚構の世界であった。彼らの想像を掻き立てたものは，遠いアフリカ大陸で遭遇する未知の冒険，奇怪な風物や自然，原住民との戦い，超自然の出来事であったり，架空の島々でくり広げられる政治事件であった。それらはロマンティックな幻想物語からリアリスティックな政治寓話にいたるまで多種多様であるが，いずれも子供たちの想像力が生み出したものであった。そうした物語の主人公は，子供たちの夢を叶えられる万能のヒーローであることを求められ，そのためウェリントン公爵は極端に理想化された完全無欠な姿で描かれたのであった。

(二) アングリア伝説：ザモーナ公爵にみるヒーロー像

アーサー・ウェルズリからドゥアロウ侯爵へ

アングリア伝説はグラスタウン物語の舞台と登場人物の多くを受け継ぎながらも，主人公はウェリントン公爵から長男のアーサー・ウェルズリ（ドゥアロウ侯爵）に移り，彼を中心とした様々な恋愛物語が描かれる。やがてドゥアロウ侯爵はザモーナ公爵となり，アングリア国王として君臨し大勢の女性たちにかしづかれる一方，義父となったノーザンガーランド伯爵と愛憎劇をくり広げる。

シャーロットの最初の恋愛物語 'Albion and Marina' (10.1830) におけるアーサー（ドゥアロウ侯爵）は，ウェリントン公爵の英雄としての資質が，指導力，勇気，英知，公明正大さ，愛国精神などにあったのに対して，アポロを思わせる均整のとれた体型と端正な顔立ち，優雅な身のこなし，人を捉えて離さない深く澄んだ褐色の瞳，メランコリックな風情，時たま見せるはにかんだ魅力的な微笑の持主で，武将としてのイメージはもたされていなかった。[8] 彼は可憐な乙女 Marina と恋に落ちるが，父は息子の愛を試すためにアフリカへの留学を命じる。かの地での4年の別離のあい

だに恋人の面影も薄れ，アルビオンがわずかにゼルジアに心を移した時，故国で彼の帰りを待ちわびていたマリーナは失意のうちに息絶える。帰国して彼女の死を知ったアルビオンは，何処とも知れず姿を消す。語り手チャールズ (Charles Wellesley) の口調に皮肉が混じるものの，アルビオン（ドゥアロウ侯爵）は悲恋の主人公として描かれている。ただし悲劇的な結末はチャールズによる創作であり，実際には 'The Bridal' (7.1832) においてふたりは結ばれる。この作品では，妖術を使ってドゥアロウの心を動かそうとするゼノウビアの執念にも負けず，彼はマリアン・ヒュームへの愛を遂げる誠実な恋人であり続ける。

純真な若者としてのドゥアロウ像に変化が現れるのは 'Something about Arthur' (5.1833) 以降である。シャーロットはこの作品で時間をさかのぼって，アーサーの15歳当時の恋愛事件を新たに書き加えている。ここで早熟な彼は Mina Laury と最初の恋をするが，若すぎるという父の反対により恋は実らない。しかし彼らの関係は愛人として続くのであり，ここにドゥアロウ侯爵の女性遍歴の物語が始まることになる。続く 'The Foundling' (5-6.1833) では，マリアンを妻に迎えた19歳のドゥアロウ侯爵は，Sydney を片腕として国会を運営する，野心に燃える青年政治家である。生まれの良さと非の打ち処のない容姿によって，社交界でも人々の注目を集め，その将来を嘱望されている。

その後 'The Green Dwarf' (9.1833) を経て，シャーロットは詩や物語を集めた 'Arthuriana' (9-11.1833) を書いている。そのうちの3篇の散文作品に登場するドゥアロウ侯爵の変化を順に追ってみる。最初の 'The Post Office' (9.1833) では Flower による 'The Life of Verdopolis' (Branwell, 1833) に掲載されたドゥアロウ侯爵のスキャンダルを暴いた記事を読んだチャールズが，「悪の淵に救い難いまでにはまりこんでいる」という兄の噂の真偽を確かめに行き，本当らしい感触を得る。その悪事の内容については書かれていないが，ドゥアロウ侯爵がシドニーの妻ジュリアに対して，いぜん '影響力' をもっていることがほのめかされている。'The Fresh Arrival' (10.1833) ではマリアン・ヒュームが長男を出産したことが告げられ，若き父親ドゥアロウ侯爵が赤ん坊を抱いて 'he gazed with a smile of such unutterable fondness as I never saw beaming on his countenance either before or since'[9] といった表情で我が子を見つめている。しかし彼の子供の養育にたいして父親らしい気遣いをみせるのは，むしろ叔父のチャールズである。彼はこの子が父親譲りの高慢と激しい気性から蕩児になることのないよう指導するのが，叔父としての自分の義務であると考える。自分のことは棚にあげ，自然に親しませ質素を旨とした生活をするなど，ルソー的な教育方針を披露している。[10]

シャーロットがドゥアロウ侯爵に求めているのは父親像ではなく，家庭や生活とは無縁な放縦な男らしさである。侯爵の過去がさらに書き加えられる。すなわちマリアンと結婚する以前に Helen Victorine とのあいだにすでに庶子がいた。Fitz-Arthur と名付けられたその子は，現在4歳になっていることが 'High Life in Verdopolis' (2.1834) に述べられている。思い付くままに書き接がれてい

った初期作品に整合性を与えるために，シャーロットは物語の時間的な流れを無視してまで，ドゥアロウ侯爵を多くの女性関係をもつ放埒な男として構成しようとしていることがわかる。'Arthuriana' に収録されている 'The Tea Party' (10.1833) でも，息子の洗礼が済んでお茶会を開くマリアンに，エルリントン卿らが酔いにまかせて言い寄ろうとする騒ぎが描かれる。この折のドゥアロウ侯爵は客のひとりのゼノウビアと目配せして，仕事と称して出かけてしまう。マリアンのどこかやつれた様子に，すでに夫の心変りが暗示される。

'Arthuriana' は統一されたテーマはもたないが，ドゥアロウ侯爵の私生活に焦点をあてたものである。そこに描かれるドゥアロウ侯爵は，かつてマリアンへの忠誠を誓った純真なアーサーとはすっかり変って，妻以外の女性たちとも関係をもつ不実な男性に変っている。だがその不倫に対する罪悪感は皆無であり，むしろ女性を惹きよせる力は彼の美質のひとつになっている。こうした兄に対してチャールズは批判と嫉妬の入り混じった複雑な態度を示している。ふたりはしばしば対立し，'The Fresh Arrival' でも，チャールズは兄から家への出入りを禁じられている。両者の反目についてラチフォードは，それがバイロン的ヒーローに対するシャーロット自身の葛藤を示すものと捉えている。すなわちドゥアロウ侯爵の放蕩に一方では想像を掻きたてられながらも，他方ではその非道徳を批判しなければならない気持ちも働き，チャールズをいわば検閲の道具にしている。すなわちチャールズに批判のポーズを取らせながら，バイロン的なヒーローになりつつあるドゥアロウ侯爵の魅力を描くというものである。[11]

初期作品では物語の大半が，チャールズによって語られる。彼自身は物語の主人公となることはないが，たえずザモーナ公爵の傍らにあって，その言動を見つめるという役割を担い，ザモーナ公爵とともにつねに物語に登場する。脚光を浴びる兄の陰にあって，チャールズは強い劣等感を抱きながら，兄の言動を羨望と嫉妬の入り混じった気持ちで観察し報告する。その皮肉な語り口，屈折した感情，変節ぶり，臆病さ，覗き趣味，中傷好きといった性格は，チャールズという人物をリアルな等身大の人間にしている。現実離れした巨大なヒーローのザモーナ公爵の造形が，この卑少とも思えるチャールズの目を通して行なわれるのである。

かつてのグラスタウン物語においては，チャールズは兄と同じように才能豊かな美少年として描かれていた。[12] それがアングリア伝説になると，シャーロットはチャールズを恋愛物語の主人公ではなく語り手に後退させたばかりでなく，その性格まで矮小化させている。兄とその女性たちの密会の場面をかぎつけ，ふたりのやりとりに聴き耳を立てたり，覗き見したりするチャールズの性癖は，彼の批判の論拠を怪しませ，その語りの信憑性にまで疑問をもたせる。チャールズの語りは，必ずしもラチフォードのいう道徳的なマウス・ピースというのみでは説明しえない。それは忠実な報告あるいは道徳的な注釈というよりも，むしろ恋人たちの様子を覗う嫉妬をもつ歪んだ目によって，恋愛物語の秘密めいた性的な雰囲気をつくりだすことに貢献している。また何よりもチャール

ズという男性の語り手を用いたことによって，ザモーナ公爵の放埒な生活ぶりも語りやすく，さらに公爵の心理にも近づきやすいという利点があった。物語の方法に対するシャーロットの作為を語るものといえよう。

ザモーナ公爵の誕生

1830年10月，ドゥアロウ侯爵は宿敵であったエルリントン卿と手を結んで，対アシャンティ戦に勝利する。その功績で，ヴェルドポリス連合政府は彼にザモーナ公爵の爵位と領土を与える。シャーロットの物語では 'High Life in Verdopolis' (2.1834) からザモーナ公爵の名が使われている。この作品の直前に書かれた 'A Leaf from an Unopened Volume' (1.1834) は，24年後のアングリアを舞台にしたものだが，そこではザモーナ公爵はさらに「偉大な」という呼称までついた Emperor Adrian として君臨し，絶大な権力を振るっている。40代はじめの威厳を漂わせ畏怖をさえ感じさせる皇帝に，もはや少年の面影はなく，戦いの明け暮れのなかですっかり精悍な顔立ちに変っている。威圧的な物腰からは近寄りがたい雰囲気が醸し出され，「野心をみなぎらせた鋭い眼光」と「深謀遠慮をめぐらす」公爵の風貌は 'It looked, ・・・, as if heaven, being wrath with mankind, had sent Lucifer to reign on earth in the flesh.'[13] というように，天から遣わされたルシファーに例えられている。ザモーナ公爵の形容には目立って比喩が多くなり，ロマン主義的なヒーローとして肥大化していく。

'High Life in Verdopolis' は，エピグラフにバイロンの *Childe Harold's Pilgrimage* の一節が引用され，さらにザモーナ公爵は上流社交界の寵児として華麗な女性遍歴をくり広げるチャイルド・ハロルドに擬せられるなど，バイロンの影響を強く窺わせるものになっている。物語の梗概は次のとおりである。

主人公はザモーナ公爵の片腕 Warner Howard Warner である。アングリア最大の旧家の主である彼は，結婚相手を見つけるためにヴェルドポリスの社交場に姿を現す。並居る美女のなかでフローラ・ロスリンは持参金がないため，マライアとエディスのスニーキー姉妹は高慢なため，ルイーザはザモーナ公爵の叔母にあたることから，いずれも候補者とはならない。Grenville 将軍の娘 Ellen は目にかなうが，彼女の方がウォーナーの容姿――同性愛者などとからかわれるほど，彼は華奢で女性的な外見をしている――に内心がっかりしている。

エレンはゼノウビアの愛弟子で，機知に富む率直で聡明な女性。父が決めた婚約者 Lord Macara Lofty がいるが，ウォーナーと話すうちに，彼がその外見とは異なり，男らしい人物であることがわかり好意をもつ。

狩りが催され，ローフティ卿は獰猛な猟犬たちに震えあがるが，ウォーナーは動じず，不思議な透視力を発揮する。しかしノーザンガーランド伯爵の侮辱に腹をたて，ひとり一行を離れ森のなかに姿を消す。やがて何処からともなく現れたザモーナ公爵に別荘に招かれる。公はウォーナーの透

視力に興味を示し，とくに彼が見た女の亡霊が，今は亡きマリアン・ヒュームではないか聞きただそうとする。やがて森の中の館につき，Mina Laury に迎えられる。ザモーナ公爵は4歳になる Fitz-Arthur と，マリアン・ヒュームの遺児で6カ月の Julius を，父親らしく抱きしめる。後に召使から，公爵が館を訪れたのは2年ぶりで，マイナとの関係はマリアンと結婚する前からのことであったことを知らされる。

舞台は再びノーザンガーランド伯爵の屋敷。おなじみの顔ぶれで退屈しのぎにマスカレードをすることになる。仮装した人々の中に部外者が幽霊の姿で紛れ込んでおり，魔術師に扮していたマカラ・ローフティに見破られて逃げ出す。夜も更けて，メアリがひとりで先祖の墓地に佇ずんでいる。そこにザモーナ公爵が現れ彼女を抱擁するが，それは別の女性と勘違いしてのことであった。そのとき銃弾が公爵の頭をかすめる。狙撃したのはローフティであった。彼は死んだはずの兄が生き返り，この場所で今夜ザモーナ公爵と会合するのを知り，家督を奪われることを恐れて兄の暗殺をはかったのである。かかるローフティの卑劣さが知れ，グランヴィーユ将軍もエレンとウォーナーの結婚を許す。

ウォーナーとエレンの恋の展開は，それまでのパターンであった美男美女のロマンティックな恋物語ではなく，たがいに内に秘めた魅力を発見するという意味で，その後の‘Henry Hastings’(2-3.1839) における William Percy と Elizabeth Hastings を予感させる。しかしここで注目したいのは，ウォーナーよりもザモーナ公爵である。バイロンを巻頭に頂いた作品は，さらにバイロンの主人公を思わせる声音で，ザモーナ公爵に次のような第一声を放たせている。

> I like high life: I like its manners, its splendors, its luxuries, the beings which move in its enchanted sphere. I like to consider the habits of those beings, their way of thinking, speaking, acting. Let fools talk about the artificial, voluptuous, idle existences spun out by dukes, lords, ladies, knights and squires of high degree. Such cant is not for me; I despise it. What is there of artificial in the lives of our Verdopolitan aristocrasy ? What is there of idle ? Volupltuous they are to a proverb, splendidly, magnificently voluptuous, but not inactive, not unnatural.[14]

上流貴族の華やかな生活と享楽を高らかに歌い上げようする，自信に溢れた若いザモーナ公爵の姿は，ヨーロッパ社交界の寵児として各地を漫遊し享楽の限りを尽くすチャイルド・ハロルドの姿と重なる。ザモーナ公爵の魅力的な容姿は，あらゆる女性を惹きつけずにはおかない。ここでも今なお彼への未練を断ち切れないゼノウビアが「心の平衡を失うほど」悩み苦しんでいる。弟子のエレンも公爵に会うまでは，あの非道徳で放縦と噂に高い彼に冷淡にしてみせると公言しながら，空しく彼の魅力に微笑を禁じえない。ザモーナ公爵は女性の魂を奪い，彼女たちを意のままに操りなが

ら，女性たちに一片の敬意も払おうとしない。女性たちは彼の快楽のための道具にすぎず，彼の前で誇りを失い，暴君に自ら進んで身を委ねる。こうしたザモーナ公爵の姿は，トルコの後宮に君臨し，多くの妻妾に囲まれたサルタンに例えられている。

また主要人物の肖像画をチャールズがめくりながら批評する趣向の 'A Peep into a Picture Book' (5-6.1834) では，ザモーナ公爵の姿が次のように描かれている。

> Oh, Zamorna ! What eyes those are glancing under the deep shadow of that raven crest ! They bode no good. Man nor woman could ever gather more than a troubled, fitful happiness from their kindest light. Satan gave them their glory to deepen the midnight gloom that always follows where their lustre has fallen most lovingly. ・・・ All here is passion and fire unquenchable. Impetuous sin, stormy pride, diving and soaring enthusiasm, war and poetry are kindling their fires in all his veins, and his wild blood boils from his heart and back again like a torrent of new-sprung lava. Young duke — young demon ! [15]

公爵はバイロンの主人公あるいはトルコの皇帝を越えて，ここでは悪魔的な魅力を秘めた超人的なヒーローになっている。その情熱は燃えさかる炎，噴出する溶岩に例えられ，それを鎮めることはだれにもできない。そしてその輝きを際だたせるように，深い闇が彼を取り巻いている。

続く 'The Spell' (6-7.1834) はチャールズが，その「せんさく好き」のために兄の家を追われた腹いせに，兄の二重人格ぶりを暴くつもりで編集したという前置きで始まる。すなわちザモーナ公爵の「表裏のある，偽善的で，後ろ暗い，狂気を秘めたその性格を知り抜いている人間が，一人はいる」ことを思い知らせようというものである。チャールズのこの復讐心の背景には兄嫁への思慕がある。ただし物語ではチャールズは10歳とされているので（大人びた口調はとても子供とは思えないが），メアリへの感情も憧れ以上のものではないかも知れない。それでも好奇心が強く，執拗な視線には嫉妬が感じられ，屈折した心理を窺わせる。

物語にはメアリの夫としてのザモーナ公爵と，マイナ・ローリの別荘を訪れるふたりの息子たちの父としての，もうひとりのザモーナ公爵が登場する。対照的な二つの顔をもつザモーナ公爵についての謎解きは，後者が双子の兄 Ernest (Duke of Valdacella) であること，ふたりが一緒の姿を他人に見られると死ぬという呪いのため，これまで他人にはわからないように，ふたりはしばしば入れ代りながら成人したというものである。兄は Wellingtonsland の王妃 Emily と結婚し，妻は人里離れた地で二人の子供たちと暮らし，夫は人目を避けながら一年の半分を家族と共に過ごす生活を送ってきたという説明がなされる。物語はザモーナ公爵の分身を創りだして終るが，チャールズは追記として次のように述べている。

Reader, if there is no Valdacella there ought to be one. If the young King of Angria has no alter ego he ought to have such a convenient representative, for no single man, having one corporeal and one spiritual nature, if these were rightly compounded without any mixture of pestilential ingredients, should, in right reason and in the ordinance of common sense and decency, speak and act in that capricious, double-dealing, unfathomable, incomprehensible, torturing, sphinx-like manner which he constantly assumes for reasons known only to himself.[16]

すなわちザモーナ公爵がもう一人いると考えなければ，あの気まぐれで残酷で，測り知れない謎を秘めた人物を説明することなど不可能である。もし彼が一人の人間であるというのなら，その肉体と魂はおそろしく有害な成分から構成されているに違いないと，チャールズは読者に語りかけたうえで，最後にザモーナ公爵が22歳で狂死するという予言をして物語を終えている。

ザモーナ公爵の出生の秘密や二重人格ぶりがここで新たに書き加えられたのは，ザモーナ公爵を超現実的な一面も含んだ巨大なヒーロー像として作りあげようという意図からであろう。またそこには，複雑化するザモーナ公爵の性格づくりの意味もあるものと思われる。

浮気な夫，酷薄な恋人としてのザモーナ公爵の姿は随所に見られる。例えば 'A Late Occurrence' (1.1835) では，ザモーナ公爵の誘惑に負けたジュリアがついに夫シドニーと別れ，公爵のもとに走るのだが，彼の冷やかな応接に心の凍りつく思いをする。また正妻のメアリ・ヘンリエッタも夫の陰に女性たちの気配を感じ，夫とともにいる時いがいはつねに不安にさいなまれている。メアリにとってザモーナ公爵はすべてであっても，公爵にとっては彼女がすべてでないところにメアリの苦悩がある。

ザモーナ公爵というヒーロー像の特徴のひとつは，そのイモラルな点にある。完全無欠の英雄であったウェリントン公爵に対して，ザモーナ公爵は反道徳的で，多くの女性を誘惑しては捨てて顧みない蕩児である。ヒロインたちはその移り気な公爵に恨みを抱くのではなく，むしろ彼の酷薄さ，放縦さゆえにいっそう彼に惹きつけられていく。シャーロットのヒーローたちについてジェランは，彼らの道徳的な欠陥 (moral imperfection) を指摘し，そのため初期作品の恋愛物語は幸福な結婚へは導かれず，ヒロインたちが不幸に陥るという結末になると説明している。さらに彼女たちの不幸は，たんに恋人の不実さのゆえばかりでなく，自分の誇りをなくすまでにヒーローに心奪われるヒロイン自身の嘆きでもあると述べている。[17] すでに見てきたようにヒロインたちが愛を捧げるザモーナ公爵は，女性にとってその心の内は窺い知れない，近寄ることのできない孤高の人であり，ときに一個の男性を越えた悪魔的な存在として彼女たちの前に現れるのである。

ザモーナ公爵の変貌

ザモーナ公爵の形象にはシャーロットの愛読した聖書，シェイクスピア，ミルトン，スコット，バイロンなどをはじめ，無数のソースが指摘されるであろう。だがザモーナ公爵はそれらの合成ではなく，シャーロットの理想を投影した独自のヒーローであったことはいうまでもない。バイロン（そして彼の主人公たち）はシャーロットを魅了したことは疑いないが，ザモーナ公爵に取り入れられたのはバイロンの一面にすぎなかった。ザモーナ公爵はいかに享楽的な人物として描かれようと，彼には快楽と表裏をなす孤独感や倦怠感は希薄である。公爵には人の道を踏み外しても添いとげずにはいられない自己の情念をおぞましく思う気持ちも，あるいはひとつの理想の女性像を求めて満たされないままに女性たちのあいだを巡歴する苦悩もない。また自分の愛する女性をことごとく不幸にしてしまうという苦い絶望感も知らない。暗い罪悪感，宿命感，反逆精神といったものをもたないザモーナ公爵は，いわば〈毒のないバイロン〉ということができよう。ジョン・メイナードはバイロンの影響について，ザモーナ公爵にはバイロンの暗黒面は取り除かれた形で導入されながらも，シャーロットはバイロンを通して，しだいに閉塞していく当時の社会環境では触れられない情熱や性の世界を知ることになったと述べている。[18]

ザモーナ公爵の性的側面がリアリティをもって描かれるようになるのは‘Julia’(6.1837)以降である。公爵の描き方に変化が見えてくる。それまでの比喩の多い誇大な描写から，日常的なシチュエーションで垣間みられる，一人の男の素顔を捉えることへと移ってくるのである。

作品の紹介に入る前に，物語全体の状況をまとめておきたい。シャーロットは1835年7月から38年12月までのおよそ3年半を，ロウ・ヘッドにあるウーラー女史の私塾の教師として過ごした。ブランウェルと手紙をやり取りしながら状況を把握し，休暇で帰省した折などに創作にあたった。物語の主導権はブランウェルにあり，彼は姉がロウ・ヘッドに発つと，さっそく第二次アングリア大戦に着手した。それによれば，ヴェルドポリス内閣はアングリア王国を連合から追放する決定を下し，1836年4月には連合軍がアングリアの首都エイドリアナポリスに迫っている。

‘Passing Events’(4.1836)はこうした状況をシャーロットが自作に取り入れながら創作したもので，7つの断片的な情景から構成されている。その内容は主だった登場人物たちの大戦前夜のようすである。再婚した夫ソーントンの身を案じるジュリア，ノーザンガーランド伯爵を気遣うゼノウビア，Cross of Rivauxの別荘でザモーナ公爵を待ち続けるマイナ・ローリ，あるいはヴェルドポリスの裏町でBrother Ashworthと名乗って布教活動をするノーザンガーランド伯爵，またWellesley Houseでは夫と父の対立に胸をいためるメアリの姿が描かれる。やがてエイドリアナポリスは巨大な兵站部と化し，総司令部では重大な決意をしたザモーナ公爵が，駆けつけたメアリを追い帰す。後日，敵の手におちたアングリアの様子が新聞で伝えられ，逃走したザモーナ公爵の肖像画をはじめ財産が競売にふされる。やがて首都は敵の手に落ち略奪にさらされる。ザモーナ公爵は都落ちす

る。いっぽう蜂起の機会をねらっていたノーザンガーランド伯爵はザモーナ公爵を裏切り，暫定政府を樹立して共和国を宣言する。捕らえられた公爵は Ascension Isle へ流刑になる。

'Passing Events' から14カ月ぶりに書かれた 'Julia' (6.1837) では戦況は一転し，ザモーナ公爵はアングリア王国に帰還し，いっぽうノーザンガーランド伯爵は逃走中である。この物語もやはりいくつかの場面をつなぎ合わせたもので，一貫したストーリーをもたない。時間はイーヴシャムの戦い直前に設定され，ザモーナの軍が町を包囲している。以下に梗概を示す。

チャールズはザモーナ軍が包囲するイーヴシャムの町に，評判の良くないマカラ・ローフティと滞在している。遠くで時おり銃撃の音が聞こえる。情婦のルイーザ・ヴァーノンは一度はノーザンガーランド伯爵を見限り，このマカラとの情事に走ったこともあったが，今ではまた撚りをもどしている。だが今はその彼とも離ればなれで，彼女はザモーナのもとに捕らわれている。

先頃ヘンリ・ヘイスティングズが出版した本を読んだチャールズは，2年前の事件を思いだす。お茶に招かれたヘンリはからかわれているとも知らずに，ジュリアとマライア・パーシィを相手にカラバー作戦での手柄話を得意になって話している。それをソーントンに指摘されてむっとするが，女たちのお世辞に機嫌をなおす。そこにハートフォード卿が現れ，ヘンリなど歯牙にもかけず女性たちの注意を引きつけ，誇りを傷つけられたヘンリは怒って出て行ってしまう。これを恨みに思った彼は，この本を書いて意趣がえしをしたわけである。

舞台は郊外のメソジスト派の教会。かつてその牧師が迫害者を呪い殺したエピソードが紹介される。チャールズは明日の集会の準備に来たのだが，そこに William Percy とザモーナ公爵の付人の Rosier が現れる。作戦本部に案内されていくと，そこではソーントンやイーナラなどが険しい表情で話し込んでいる。イーナラはルイーザの扱いについてザモーナ公爵に相談する。公爵が彼女に会うことになるが，彼の胸は妻メアリの面影でいっぱいである。幼い Caroline Vernon がザモーナ公爵の膝で他愛のないおしゃべりをしている。まもなく母親のルイーザが現れ，その哀れっぽい様に公爵もいくらか心動かされる。しかし「自由」をという願いが聞き入れられないとわかった途端に，彼女はすさまじい悲鳴をあげ公爵を狼狽させる。結局，ルイーザはエイドリアン砦に送られる。チャールズはいよいよ戦いの火蓋が切られようとしている町を後にする。

物語の語り手 Charles Wellesley は，'Passing Events' 以降 Charles Townshend とその姓を変えている。しかしその語り口から辛辣さは消え，脇役のひとりとして登場するだけになっている。シャーロットはここではチャールズとは別に著者として顔をのぞかせ，読者に直接語りかける。とくに 'Julia' や 'Mina Laury' や 'Caroline Vernon' など後期の作品ではその傾向が強く，チャールズの皮肉な口調を借りるのではなく，より権威をもつ全知の著者としてコメントを加えている。

'Julia' では夕暮れにひとりもの思いにふけるザモーナ公爵の姿がある。彼は一年にもおよぶ離別にたえかねて妻を慕い，さらに自分たちを引き裂く戦争と野望を呪う。かつては復讐のためには妻をも犠牲

にしようとしたザモーナ公爵が，今は戦いをうち捨て妻のもとに帰りたい気持ちを抑えられない。そうしたザモーナ公爵の変化について，著者は次のようにいう。'He cursed War & ambition — Warner, if he had seen him at this moment, would have gone half-frantic — His troops were arranged, his plans were laid for an awful crisis. it was at hand and he was sick of it.'[19] これまで政争に明け暮れ，遮二無二突き進んできたザモーナ公爵が，はじめてそうした生き方に疑問を覚える。公爵をヒーローとして特徴づけてきた野望，情熱，自尊心などが衰え，より人間らしい弱さをもった常人へと変わりつつある。

'Julia' において初めて妻のメアリ・ヘンリエッタを振り返ったザモーナ公爵は，'Mina Laury' (1. 1838) では情婦マイナ・ローリの存在を今さらながらに意識する。Lord Hartford がマイナに思いを寄せていることを知った公爵は，なぜか寝つけない。眠れないザモーナ公爵の姿が次のように描かれている。

> Long Zamorna lay awake, neither Youth, nor health, nor Weariness could woo sleep to his pillow — he saw his lamp expire — he saw the brilliant flame of the hearth settle into ruddy embers — then fade, decay & at last perish — he felt silence & total darkness close around him — but still the unslumbering eye wandered over images which the fiery imagination pourtrayed upon vacancy —[20]

ランプが燃え尽き，炉のおき火も灰に変わり，辺りに闇が落ちてきても，ザモーナ公爵に眠りは訪れない。彼を愛した多くの女たちが，火の気がなくなるまで炉を見つめながら感じていた孤独と不安を，ザモーナ公爵が今感じているか否かはわからない。

だがとにかく公爵はマイナの愛を確かめずにはいられない。ふたりが向い合う場面は，これまでの彼らの関係を象徴するような場面になっている。マイナは彼女を正妻として迎え，安定した家庭生活を保証する実直なハートフォード卿のプロポーズを退け，家族や世間の非難を受けながらも，気まぐれなザモーナ公爵の愛人として生きることを選ぶ。マイナにとって愛は理性を越えた力であり，愛においては彼女は自分を捨てるしかない。前回見たように，ザモーナ公爵はマイナが彼に献身的な愛を捧げ，いかなる犠牲も厭わず絶対服従することを求める。それはいわば主従関係，さらには絶対神とその僕の関係であり，マイナはあたかも神に仕えるように，報いを期待することなくザモーナ公爵に仕えて悔いない。マイナにとってザモーナ公爵の命令は神のそれであり，反逆は許されない。厳格で嫉妬深く，たとえ不合理であっても犠牲を求め，その絶対的な支配力をもつザモーナ公爵の造形には，シャーロットが愛読した旧約聖書の神のイメージがうかがわれる。

マイナの姿にはバイロンの愛人であったオーガスター・リーを思わせるものがあり，'Mina Laury' は彼女のザモーナ公爵に寄せる自滅的な愛の分析ともいうべき作品になっている。著者はマイナが逃れようもなくザモーナ公爵への愛にとらわれていることを，憐れみと驚きの眼で見つめる。公爵の愛のささやきに酔う彼女に対して 'Strong-minded beyond her sex — active, energetic, and accomplished in all other points of view — here she was as weak as a child' [21] とコメントをしている。著者の声で語るのは，チャールズの主観的な——ザモーナ公爵には皮肉な，相手の女性たちに対しては同情的な——語りでは伝えられない，達観した見方を提示しようと意図したためと思われる。その直前にも著者は，公爵への愛を疑われたことに驚き気絶したマイナを見て，内心の満足を覚えるザモーナ公爵について 'People say I am not in earnest when I abuse him — or else I would here insert half a page of deserved vituperation — deserved & heart-felt — as it is I will merely relate his conduct without note or comment —' と特にザモーナ公爵を批判する様子も見られない。そのいっぽうマイナに対しては魔力を発するザモーナ公爵が，思いがけず妻が現れたことに慌てる滑稽な姿が捉えられている。彼はマイナには巨人であっても，読者の目にはひとりの平凡な男でしかない。ザモーナ公爵のロマン主義的なヒーロー像は相対化され，もはや絶対的な崇拝の対象ではなくなっているということが言えよう。

初期作品のほぼ終りに位置する 'Caroline Vernon' (6-8/11-12.1839) では，ザモーナ公爵の姿は二つに分裂している。先に紹介したように作品は2部から成り，そこに登場するザモーナ公爵はふたつの顔——後見人および誘惑者——をもっている。第1部における彼は麦わら帽子にシャツ姿で，額に汗して農作業にいそしみ，被後見人のキャロラインがパリの社交界にデビューすることに難色を示し，出発にあたっては身を謹むよう説教する道徳家である。第2部における彼は首都で議会の運営にあたり，上流社交界に姿を現す華やかな元首であり，キャロラインがザモーナ公爵の過去を知って帰国し，彼の前にひとりの女として姿を現すと，公爵は誘惑者に変身する。この落差に不自然を感じたのか，シャーロットは後に第1部の終りの部分を大幅に削除している。最初の原稿ではザモーナ公爵は，誘惑の舞台としてよく使われる月明りの庭で，「誘惑する」のではなく「説教する」かたちになっている。それでは誘惑に対するパロディである。

ザモーナ公爵のもつ〈後見人〉とは別の〈誘惑者〉の顔を引きだすのはキャロラインである。その意味では誘惑者はむしろ，この無邪気なキャロライン自身というべきであろう。公爵の変貌ぶりが 'Hitherto we have seen him rather as restraining his passions than yielding to them — he has stood before us rather as a Mentor than a Misleader — but he is going to lay down the last garment of light & be himself entirely' [22] と伝えられる。さらに著者はザモーナ公爵と道徳的なフィディーナ公爵をあえて比較し，この怖いもの知らずの少女にたいして「フィディーナ公爵ならば，その危険な芽を優しく摘みとって誤りなく導くであろうが，利己的なザモーナ公爵にはそうした moral Great

Heart はなく，何のためらいもなく若い花を手折り自分の祭壇の飾りとするであろう」と続ける。そしてキャロラインの前に現れたザモーナ公爵は，

> "If I were a bearded Turk, Caroline, I would take you to my Harem" — His deep voice, as he uttered this — his high-featured face, & dark large eye, beaming bright with a spark from the depths of Gehenna, struck Caroline Vernon with a thrill of nameless dread — Here he was — the man that Montmorency had described to her — all at once she knew him — Her Guardian was gone — Something terrible sat in his place.[23]

ここに見られるザモーナ公爵の姿は，サタンやサルタンの比喩によってこれまで繰り返し描かれてきた放縦な公爵である。彼はふたたびバイロン的なヒーローに戻っているように見える。そしておなじみの誘惑の場面が展開される。しかし「キャロライン・ヴァーノン」はそれまでの恋愛物語とおなじ題材を用いながら，その扱い方とテーマはこれまでとは異なっている。それはザモーナ公爵の誘惑の物語ではなくして，ひとりの少女が大人になる，いわばイニシエーションの物語となっているのである。

キャロラインは，ノーザンガーランド伯爵と彼の情婦ルイーザ・ヴァーノンのあいだに私生児として生まれ，ザモーナ公爵を後見人として成長する。「バイロンを読みすぎ」た「想像力の強い」少女が，やがてパリに出て，そこでザモーナ公爵の放縦な一面を知らされ，好奇心をかきたてられ，彼への関心を「恋なのかも知れない」と思い込み，かれの前にひとりの女性として戻っていく。彼女は公爵との再会の場面を想像の中でロマンティックに思い描いていたが，実際に彼を眼の前にしたとき強い羞恥心に襲われる。キャロラインの姿は次のように描かれている。

> — they intimated that he looked upon her with different eyes to what he had done, & considered her attachment to him as liable to another interpretation than the mere fondness of a Ward for her Guardian — her secret seemed to be discovered — She was struck with an agony of shame — her face burned — her eyes fell — she dared look on Zamorna no more.[24]

「自分の秘密が暴かれたように感じた」のは，無意識のうちにキャロラインの心のなかに育くまれていた感情が，ザモーナ公爵に対する性愛であることに気づかされたためであり，自分もまたひとりの女であるという事実を認識させられたからである。「すべての男女とおなじように，経験の園でぶどうを摘むひとり」として，キャロラインはザモーナ公爵の多くの女性たちのひとりに身を連ねる。結果で見るかぎり，彼女もまたメアリやマイナとおなじように公爵への愛に殉じたかに見え

る。しかし盲目的な愛に自己の主体性を失っていった彼女たちとは異なり，キャロラインは彼女自身を客観視している。彼女は自らの「バイロン的」情熱を自覚することによって，バイロンを脱したのであり，それは著者シャーロット自身の姿でもあった。

以上，ザモーナ公爵の造形の変遷を見てきた。その姿は純真で誠実な恋人から，放縦で悪魔的なヒーローへと超人化し，やがて現実味をおびた性的な誘惑者へと変わっていった。それは一言でいうなら，巨大なヒーロー像から実物大の男性像への変容と要約できるだろう。望ましいヒーロー像の構築は，主としてバイロンに取材しながら，もっぱら観念のうえで形成されたものであった。その姿は想像のなかで肥大化し，比喩に包まれ，実在感の乏しいものにならざるを得なかった。神秘的な人間以上の存在にまで理想化されたザモーナ公爵の内面は描かれず，その造形はダイナミズムを欠いていった。そうしたヒーロー像の変化は，物語の主眼がヒーローの賛美からヒロインの注視へと移ることによってもたらされた。ザモーナ公爵への愛に翻弄される女性たちの苦悩は観念としてではなく，女性の生の現実として現れたのである。その意識の変化によって，ザモーナ公爵もまた現実の男性として見つめられるようになる。それでもなお「キャロライン・ヴァーノン」におけるザモーナ公爵は，いぜんとして強烈な魅力を放つ誘惑者であったように，シャーロットの意識の底にある男性像は，その本質において性的存在であるといえよう。

(三) ノーザンガーランド伯爵の造形から

悪役として

ノーザンガーランド伯爵はもとはブランウェルの創作の主人公であったが，[25] シャーロットは彼女の物語に，ザモーナ公爵のアンチ・ヒーロー役で登場させている。はじめは Alexander Percy 通称 Rogue という海賊であったが，後にゼノウビアと結婚し Lord Ellrington さらに Earl of Northangerland と名前を変え，その地位を向上させていく。ノーザンガーランド伯爵とザモーナ公爵は敵対関係にあり，はじめは対照的な人物として描かれるが，しだいに共通性を示すようになり，ふたりの姿が見分けのつかないほど類似してみえることもある。多くのヒロインが登場しながらもそこには一つの雛型があったように，ヒーローもまた同一人物であり，ザモーナ公爵とノーザンガーランド伯爵はそれぞれその陽画と陰画ではなかったかと思われるのである。以下では作品に断片的に現れるノーザンガーランド伯爵の姿から，その形象の変化を追ってみたい。

ロウグが最初にシャーロットの作品に登場するのは 'Characters of the Celebrated Men of the Present Time' (12.1829) においてである。このときの彼は47歳で，外見は紳士らしいが性格は残忍な男として，次のように紹介されている。

His countenance is handsome, except that there is something very startling in his fierce, grey eyes and formidable forehead. His manner is rather polished and gentlemanly, but his mind is deceitful, bloody, and cruel.[26]

この悪役としての性格づけはそのまま変わらない。前回紹介したように 'The Foundling' (6.1833) では，エルリントン卿となった彼は，ザモーナ公爵に対抗意識を燃やし，妻に向かってナイフを振りかざすといった，嫉妬深く凶暴な男として描かれている。シャーロットは卿を，自分のヒーローであるザモーナ公爵の引き立て役として位置づけているが，やがてこの悪役に興味をひかれ，彼の過去を書き加えることによって肉付けを試みる。

3カ月後に書かれた 'The Green Dwarf' (9.1833) では，若き日のパーシィが主人公の St. Claire の敵役として登場する。物語のタイトルも粗筋も Scott の 'The Black Dwarf' (*Tales of My Landlord*, 1816 の第1集に収録) や *Ivanhoe* (1819) の影響を窺わせる。以下に梗概を示す。

Verdopolis での祭典の日，Percy は許婚者の Emily Charlesworth と彼女の叔父たちの前で得意気に武術を披露する。しかし洋弓の的をはずし，観衆の中から名のりでた覆面の若者に優勝をさらわれる。彼はじつは行方不明になっていた St. Claire 卿で，エミリと恋仲であったのだが，彼の不在中にエミリは叔父によってパーシィと婚約させられていた。夕暮れにエミリを訪ねたサン・クレアは，彼女の心が変わっていないのを知り，駆け落ちの約束を交わす。深夜12時に待合せの場所に出かけたエミリは馬車で連れ去られ，森の奥の老婆の見張る古城に監禁される。パーシィはしばしば現れては，サン・クレアは死んだといって彼女に結婚を迫る。

アシャンティ族との戦いが勃発し，ウェリントン公爵はチャールズワースやパーシィやサン・クレア卿らを率いて出撃する。卿はあの夜エミリが裏切ったものと思うが，後に彼女が誘拐されたことを知る。八方手を尽くして探すが消息はつかめず，今回の戦いには死を覚悟で赴いていた。アシャンティの王 Quashia の陣に夜襲がかけられるが，敵はすでに作戦を察知しもぬけの殻であった。サン・クレアはパーシィによって通報者の濡れぎぬを着せられ，部下 Andrew の裏切りもあって弁明できない。裁判では潔白を主張するものの，それを証明するものは何もない。だがその時パーシィの部下 Ensign Bud がアンドルーの買収について証言する。さらに口封じのために殺されかかった Travers がパーシィの陰謀 —— Green Dwarf こと Andrew を使ってエミリを誘拐したこと，サン・クレアが敵と通じているという嘘の証拠をでっちあげ，卿を罪に陥れようとしたこと —— を暴露する。サン・クレアは無事に救出されたエミリと再会する。いっぽうパーシィは16年の流刑が決り，Green Dwarf も10年のガレー船漕ぎの刑に処せられる。

潔く単純ともいえるサン・クレアに対して，パーシィは狡猾な陰謀家である。それは許婚者の誘拐と監禁，恋敵を陥れようとする企み，部下に対する口封じなどの行動に見られるばかりでなく，

つぎのような容姿のスケッチにもその性格が捉えられている。

> His features were regularly formed. His forehead was lofty, though not very open. But there was in the expression of his blue, sparkling, but sinister, eyes and of the smile that ever played round his deceitful-looking mouth, a spirit of deep, restless villainy which warned the penetrating observer that all was not as fair within as without, while his pallid cheek and somewhat haggard air bespoke at once the profligate, the gambler and perhaps the drunkard.[27]

パーシィは悪役であっても，その部下のS'Death（本名Robert King）やGreen DwarfことAndrewのように醜悪な姿では描かれていない。むしろ端正な顔立ちとすらりとした体型は魅力的ですらある。だがそうした外見の下に隠された邪心は，その目や口元あるいは不健康な疲れた表情に窺われる。シャーロットは顔の表情はその人の性格を表すものと考えており，人物描写はすなわち性格描写へと繋がる。影のあるパーシィの描写は，彼の表裏のある性格を物語ることになる。パーシィはこの後16年にわたる海賊としての放浪生活のあいだに，殺人を含む様々な罪を犯し，暗い過去を背負った人物として，シャーロットの作品のなかで次第に重要性を占めていく。

次作の'The Secret'(11.1833)では，パーシィはすでにゼノウビアと結婚し，貴族に昇格している。ドゥアロウ侯爵の妻マリアン・ヒュームは，自分の出生の秘密に関する手紙を入手するため，ひとりでエルリントン卿に会いに行かなければならない。卿はマリアンを書斎に通し，これまで何人もの血を吸ってきたという愛用の剣や海賊船の旗などを自慢し，ますます彼女をおびえさせる。メアリが秘密の手紙を読み，それを炉にくべてしまうと，激怒した卿はメアリを部屋に閉じ込め，その内容を知らせるよう迫る。無力な美女が悪漢の館に監禁される設定はゴシック的である。

だがエルリントン卿のもつ真の恐ろしさは，実の息子に対する異常な憎悪にある。手紙は彼の二番目の妻であったメアリ・ヘンリエッタが，生まれてくる男児を夫から守るために，マリアンの母親と子供を交換する約束をしたものであった。この約束は実行されなかったものの，三男のヘンリはマリアンとの結婚後まもなくして溺死する。それが実の父の命令による暗殺であったことが後に判明する。パーシィ（当時の名前）は生き残った長男と次男（EdwardとWilliam）も追放してしまう。これはいわゆる〈拒絶する父親〉である。それがどのような意味をもつかは興味深い問題である。シャーロットの意識の底に，一人息子ブランウェルを溺愛する父に対して，疎外されているという思いもあったかも知れない。シャーロットもなんらかの説明は必要と考えたものらしく，後に軍人として出世したウィリアムに，'Henry Hastings'において，父のことを次のように語らせている。

"The man's a monomaniac — I'll swear to it — God bless me, I'd never marry if I thought I should inherit the wild delusion of believing that all the male children who might be borne to me were devils. ・・・ in his hypochondria dread he must darkly have concluded that he himself was not altogether human — but a something with a cross of the fiend in it — that's just the lunatic's idea, & he thinks his sons take after their Demon father — & his Daughter is the pure offering of her pleasant human mother — "[28]

パーシィが女児は溺愛しながらも男児を忌み嫌った理由について，「息子たちが父親の悪魔的な性格を受け継ぐことを恐れて」という説明である。それが説得力をもつか否かはともかく，パーシィには自分の内に流れる残忍で凶暴な血をおぞましく思う気持ちがある。彼がしばしば見せる無神論的で虚無的な態度の底には，こうした自己の存在を呪わしく感じる意識が潜んでいることがわかる。高貴な身分に生まれ，女性の愛を欲しいままにし，そうした自分を誇示する自己陶酔の気味のあるザモーナ公爵に対して，シャーロットはノーザンガーランド伯爵を素性の知れない，成り上がりの，野心的な，だが冷やかな厭世的意識をもつ反逆者として造形していく。

今やノーザンガーランド伯爵となった彼の姿が 'A Peep into a Picture Book' (5-6.1834) において，つぎのように紹介されている。

The expression in this picture is somewhat pensive, composed, free from sarcasm except the fixed sneer of the lip and the strange deadly glitter of the eye, whose glance — a mixture of the keenest scorn and deepest thought — curdles the spectator's blood to ice. In my opinion this head embodies the most vivid ideas we can conceive of Lucifer, the rebellious Archangel: there is such a total absence of human feeling and sympathy; such a cold frozen pride; such a fathomless power of intellect; such passionless yet perfect beauty — [29]

測り知れない才知，非の打ち処のない容姿，冷酷で傲然とした態度は，神に背いた堕天使のイメージと重ねあわされている。これを先に紹介したザモーナ公爵の描写と比較してみると，激情的な公爵が炎のイメージで語られているのに対して，伯爵の人間とは思えない冷酷さは氷に例えられている。その比喩は対照的であるが，どちらも現実離れした悪魔的な魅力をもつ，超人的なヒーローという点で共通している。

次作の 'A Day Abroad' (6.1834) の第4章では，ザモーナ公爵とノーザンガーランド伯爵の接近が伝えられる。ザモーナ公爵とかつての師 John Fidena は，今では疎遠になっているが，それでも公爵のなかにまだ旧師を敬う気持ちがある。またフィディーナの方も，公爵がしだいにノーザンガー

ランド伯爵に感化されていくことに胸を痛めている。そのことをチャールズから聞いた伯爵は'I'll rive, rend and pitilessly destroy the ridiculous bonds which themselves have not strength of mind enough to do away. I'll annihilate their attachment, sir, grind it small to powder and scatter it like dust.'[30] と敵意を露わにする。

こうしたノーザンガーランド伯爵の得体の知れない悪意を説明するために，ここでは彼の過去の殺人事件がさらに書き加えられる。彼がまだ若きパーシィとして放蕩な日々を過ごしていたころ，父の友人の Lord Caversham と決闘になり，卿をだまし打ちしたのである。世間は真相を知らず，彼は罪に問われることもなく今日に到っている。その日とおなじような夕陽に照らされたノーザンガーランド伯爵の胸に，20年前の記憶がよみがえる。事件の顛末を語る伯爵には，悔恨や罪の意識はなく，欺かれた人々に対する侮蔑と冷笑があるのみである。チャールズは伯爵の人間嫌いと虚無的な表情にぞっとする。

暗い過去，虚無主義，厭世観，反逆心など，ノーザンガーランド伯爵にはバイロンの暗黒面が投影されているように思われる。[31] そうした要素は，後にノーザンガーランド伯爵との接近という形で，ザモーナ公爵の造形にも加味されていく。ふたりは公的には政敵として対立しながらも，私的には親密な関係にあり，たがいに影響を与えあう。

ザモーナ公爵の義父として

ザモーナ公爵とノーザンガーランド伯爵とのあいだには，それまでの政敵という対立関係に加えて，さらに義理の父子関係が結ばれ，より込みいった骨肉の争いが展開される。ザモーナ公爵と実父のウェリントン公爵はあくまで強く正しい父と従順な息子であり続け，そこに父子の葛藤は描かれない。それに代わるかのように，ザモーナ公爵とノーザンガーランド伯爵の義理の父子は，近親憎悪ともいえる対立葛藤をくり広げる。それをシャーロットは初め二人の強者の権力争いという形で描いているが，やがてその対立の奥に，報いられない愛という独自のテーマを見いだしていく。

ザモーナ公爵との関係の成立と展開を，いくつかの作品から追ってみる。ザモーナ公爵とノーザンガーランド伯爵は1833年11月に，たがいの勢力拡大のために姻戚関係を結び，それぞれアングリア王国の国王および首相に就任する。しかし両者のあいだには見えない緊張がある。それから3カ月後に書かれた'High Life in Verdoplis'では，早くもふたりの間に不協和音が生じている。ノーザンガーランド伯爵は，娘がザモーナ公爵の浮気に悩む姿をみて内心穏やかでない。いっぽう公爵は，義父に対する自分の気持ちに確信がもてずにいる。彼はつぶやく。'that illustriously infamous relative of mine, detest and yet love, that bundle of contradictions and yet that horribly consistent whole — he forsooth will share in the power and I cannnot hinder him'[32] 悪名高い義父に対して，ザモーナ公爵は軽蔑と嫌悪を感じながらも，なにかしら心引かれるのをどうしようもない。しかも義父が自分と

権力を分けもつことを阻止できないフラストレーションも加わって，ザモーナ公爵の心はかき乱される。これまでどのような女性も，これほどかれの意識の中に入りえたものはいなかった。この意味でノーザンガーランド伯爵との関係は，ザモーナ公爵にとっては女性たちとのそれよりも重みをもつものといえよう。

続く 'My Angria and Angrians' (10.1834) では，建国成ったばかりのアングリア王国を舞台に，ザモーナ公爵とノーザンガーランド伯爵の関係の悪化が伝えられる。物語の概要はつぎのとおりである。

ヴェルドポリスの住人たちが出エジプト記さながら，続々と新しい王国アングリアの首都エイドリアナポリスを目指している。チャールズもいったんはソーントンの誘いを断わりながら，気が変ってひとりで出かけて行く。途中 Haword という村で Wiggins と名のる滑稽な若者に会う。町では祝典が開かれており Edward Percy が祝辞を述べ，また飛び入りの若者が（Major Albert じつは変装したザモーナ公爵である）国歌を披露し喝采を浴びる。翌日エイドリアナポリスの宮殿では，王妃メアリがあの Major に涙ながらに訴えている。父が反乱を企て失敗し，流刑地から弁明の手紙を書き送ってきていた。公爵は和解を求める妻の嘆願に心揺れるものの，なお義父を許し信じる気持ちにはなれない。怒りの発作に意識を失ったザモーナ公爵を見て，来合わせたウィリアム公爵は気味悪がるが，メアリは怯まず介抱にあたる。

10月５日，国王に双子が誕生したニュースに国中にもたらされる。チャールズは宮殿に出かけるが，意外にもそこは静まりかえっている。ザモーナ公爵の部下のマックスウェルの話では，閣僚会議が開かれ，そこにはノーザンガーランド伯爵の姿もあったが，なにか深刻な雰囲気であったという。後日，華やかに王子たちの洗礼とお披露目が行なわれる。だがそこにノーザンガーランド伯爵の姿はない。

公爵と伯爵はいつか雌雄を決するしかない。その日に向かって二人のあいだの緊張が高まっていく。ザモーナ公爵はいう。"Why else were we born in one country ? His sun should have set before mine rose, if their blended shinning was not destined to set Earth on fire.'[33] この世に太陽は二つ在りえないように，アングリア王国の元首もいずれか一人でなければならない。公爵は自分を裏切り，いま彼に対して非情とならざるを得ない状況を作り出した伯爵を恨み，ふたりが対決しなければならない宿命を呪うのである。この作品に描かれる対立は，ふたりの強者の避け難い権力争いとして捉えられている。

その後，ふたりの対決はいちおう回避される。だがすでに見たように，それから１年半後に書かれた 'Passing Events' (4.1836) で，その対立はクライマックスを迎える。ノーザンガーランド伯爵はふたたび反旗を翻し，公爵の信頼を踏みにじる。その背信に対して公爵は，義父がこの世でもっとも愛するメアリを死なせることする。すなわち

I swore that if he broke those bonds & so turned to vanity & scattered in the air sacrifices that I had made, & words that I had spoken, if he made as dust & nothingness causes for which I have endured jealousies & burning strife, emulations amongst those I loved. If he froze feelings that in me are like living fire, I would have revenge. In all but one quarter he is fortified & garrisoned, he can bid me defiance, but one quarter lies open to my javelin, & dipped in venom I will launch it quivering into his very spirit.[34]

ノーザンガーランド伯爵の背反は，たんに政治的な裏切りを指すばかりではない。それ以上に公爵にとって許し難かったのは，義父に寄せる「胸のなかに燃える熱い炎」を，彼が非情にも消し去り，ふたりを結んでいたはずの「絆」を断ち切ったことにある。メアリを死なせることは，妻を愛するザモーナ公爵にとっても苦しみをともなう。部下に語っているように，それは決して容易な決断ではなかった。しかし義父によせる愛と，それを裏切られた憎しみは，妻に対する思いに勝るものであったということになろう。

ザモーナ公爵の復讐は，裏切られた愛に対する復讐である。ふたりの間でくり広げられる相克は，これまでノーザンガーランド伯爵と彼を取り巻く女性たちのあいで演じられた恋愛劇と，その性格は変わらない。この意味で，ザモーナ公爵とノーザンガーランド伯爵の関係は，一種の恋愛関係であり，これまでの初期作品の多くの恋愛物語に連なるものといえよう。シャーロットはヒーローの対決のドラマの奥に，報いられない愛というヒロインの物語と同一のテーマを見ているのである。ここにおいても愛は一方的なものに留まり，相互の愛に基づく安定した関係は築かれずに終っている。愛は裏切られる形でしか描かれないのである。

結 び

これまで4回にわたった「シャーロット・ブロンテ初期作品研究」を締めくくるにあたって，最後にその物語世界の変容とシャーロットの愛の理念について述べてみたい。

1829年，兵隊人形の劇を作ることに始まった初期作品は，その後10年近くにわたって書き継がれ，その量も後にシャーロットが書いた4作の小説を上回るものになった。人形遊びも物語作りも当時の子供の一般的な遊びであって，ブロンテたちがとくに特殊であったわけではない。特殊だったのは，彼らがそれをたんなる遊戯に終らせず，将来の作家への夢に繋げていったことである。シャーロットとブランウェルは文芸雑誌「ブラックウッズ・マガジン誌」に投稿の希望を伝えたり，ワーズワースやサウジーなど著名な文人に手紙を書いたり，自作の一部を送ることまでしている。[35] シャーロットにとって初期作品は習作の意味をもち，それらの創作を通じて，彼女は後の小説の基層

となる愛の主題を見いだしていったのである。

初期作品の舞台はアフリカの架空の王国であった。その王国への発見の旅に始まり，植民地の建設，原住民との戦い，王国の成立に到るまでの一連の物語から成るグラスタウン物語は，1829年から31年のあいだに創作された。シャーロットはロウ・ヘッドのウーラー塾で，後に生涯の友の一人となったメアリー・テイラーに，この空想物語の物語について話したが，ついにその実物を見せることはなかった。友の「地下室にじゃがいもを植えているようなものよ」という遠慮のない指摘に対して，シャーロットはただ「そのとおりよ，それはわたしにも分かっているわ」と言葉少なに答えるばかりだった。[36] 現実の世界と空想の世界が相容れないことを，15歳のシャーロットはロウ・ヘッドという外界を知ることによって気づかされたのであろう。その年の12月のクリスマス休暇に帰省した彼女は，グラスタウンの終焉を詠った 'The trumpet hath sounded' という詩を書き，物語の終結を宣言している。

グラスタウン物語は幕を降ろしたが，その舞台と登場人物の多くは，アングリア伝説に受け継がれる。だがシャーロットは主題をそれまでの空想的な冒険物語から，ザモーナ公爵を主役とした恋愛物語へと転換している。33年から36年にかけてのアングリア伝説の特徴は，バイロン的ヒーローとなったザモーナ公爵に象徴されるロマン主義的な情熱であろう。バイロンがシャーロットに与えた最大の影響は，彼（および彼の主人公）の華麗な遍歴や自由奔放な生き方，あるいは反逆的な精神や悪の魅力という以上に，退屈な日常生活からの脱出であり，幻想の世界への誘いであった。

シャーロットは現実の世界から物語の世界に逃避することに対して，しだいに不安を覚えるようになる。友人エレン・ナッシへの手紙には，'If you knew my thoughts; the dreams that absorb me, and the fiery imagination that at times eats me up and makes me feel Society as it is, wretchedly insipid, you would pity and I dare say despise me.'[37] と書かれ，夢想に耽けることへの罪悪感を語っている。その半年後に，作家を志していたシャーロットは，サウジー卿に手紙を出し意見を求めた。それに対する卿からの返事は，文筆は女性の仕事にはなりえないこと，女性は本来の務めに励むべきであることを諭したばかりでなく，夢想に耽けることの危険を戒める言葉で結ばれていた。[38] シャーロットは幼い日からの空想物語と決別する時が来ていることを自覚し，その年の終りに 'We wove a web in childhood' という，失われた子供時代を回想する詩を書いている。

バイロンを脱する機縁は，ロウ・ヘッドでの教師としての厳しい現実という外的な状況もあったであろう。と同時にそれは彼女自身の成長の結果でもあった。シャーロットはバイロン的ヒーローとして創り上げてきたザモーナ公爵を，自らひとりの平凡な男性に引き下ろす。これまでザモーナ公爵は，その容姿，情熱，性的魅力によって，終始ヒーローであり続けた。彼の酷薄，尊大，不実さはヒロインたちを離反させるのではなく，かえって公爵の魅力を輝やかせ，女性たちをいっそう惹きつけることになった。ザモーナ公爵は多くの女性から愛されることによって，その愛のなかに

望ましいヒーローとして創り上げられていった。言葉をかえれば，ザモーナ公爵の存在はヒロインたちへの意味によって支えられていたといえる。公爵を戦争や政治へと駆り立てたものが男の権力欲や支配欲であることは，作品からは必ずしも明確には伝わってこない。そこに描きだされたものはヒロインたちが彼によせる愛のすがたであり，彼女たちの報いられない愛の幻想が，ザモーナ公爵という超人的なヒーローを生み出していたのだともいえる。ザモーナ公爵の存在を証明するものは，ヒーローたちが寄せる愛の観念以外にないのである。

カレン・チェイスは大要として初期作品における「男性人物は女性人物に比べて内的苦しみが少なく，その内面も単純である。それは女性とは違って抑圧を知らない男性は，その葛藤の中から内的自我に目覚めることがなかったからである」[39] と述べている。女性たちは，自分が愛したようには愛してはもらえないという諦念をもたされている。支配的で強圧的な男性に対して，報いられない愛を捧げることが女性の人生であった。彼女たちは愛に裏切られ，孤独に陥ることによって，自分たちの生の現実に目覚めていった。シャーロットは愛に苦悩するヒロインたちの姿を描く中から，女性にとって愛のもつ意味を問いかける独自のテーマを形成していったのである。ヒーローにとって愛はほとんど意味をもたなかったが，ヒロインたちは愛（あるいは実ることのない愛）を内面化し，自己の生の支えとしたのであった。

シャーロットの描くヒロインたちは愛なくしては生きられない女性たちであった。にもかかわらず彼女たちのひとりとして，愛を結婚によって実らせ幸福を手にしたものはいなかった。初期作品の恋愛物語にハッピー・エンディングをもつものはほとんど見あたらない。愛は生であるという理念を示しながらも，シャーロットは現実には愛の成立の不可能さを描き出している。そのことは現実社会における愛の成立条件の喪失を意味し，また愛は結婚という制度の中には存在しえないという告発であり，さらに愛とは現実世界においては摑みえないものという愛の至純性を含意しているものといえようか。こうしたメッセージを，表面的には結婚に終る後期の小説に読むことは可能であり，それを今後の研究テーマとしたい。

注

1） C.Alexander, ed., *An Edition of the Early Writings of Charlotte Brontë*, 1826-1832 (The Shakespeare Head Brontë, 以下 *EWCB* と略記）p.5

2） John Lock and W. T. Dixon, *A Man of Sorrow: The Life, Letters and Times of the Rev. Patrick Brontë* 1771-1861, London: Nelson, 1965 (2nd ed., London: Ian Hodgkins) 1979, p.497 子供たちの遊びについて父ブロンテ師は，後年，シャーロットの伝記資料の収集のために牧師館を訪れたギャスケル夫人に宛てた1855年7月24日付けの手紙で，次のように書き送っている。

When mere children, as soon as they could read and write, Charlotte and her brother and sisters used to invent and

act little plays of their own, in which the Duke of Wellington, my daughter Charlotte's hero, was sure to come off the conquering hero — when a dispute would not infrequently arise amongst them regarding the comparative merits of him, Bonaparte, Hannibal and Caesar.

3）Ellen Nussey, 'Reminiscences of Charlotte Brontë', *Brontë Society Transactions* (1899) 2:10:79
Every morning was heard the firing of a pistol from Mr. Brontë's room window, — it was the discharging of the loading which was made every night. Mr Brontë's tastes led him to delight in the perusal of battle-scenes, and in following the artificial of war; had he entered on military service instead of ecclesiastical he would probably have had a very distinguished career.

4）John Lock and W. T. Dixon, *A Man of Sorrow, op., cit.*, p.361

5）Helen Moglen, *Charlotte Brontë: The Self Conceived*, The University of Wisconsin Press, 1984
モグレンは家父長的な家庭に育ったシャーロットが，母や姉たちに対しては自分だけが生き残った後ろめたさを感じ，父に対しては従順な娘として，また弟に対しては敬愛し賛美する姉としてマゾヒスティックな心理を持つに到ったと洞察する。初期作品はブランウェルとの共生から生み出された空想世界で，そこでは弟に自我一致することでシャーロットは自分のアイデンティティを見いだした。そのブランウェルを客観視できた時，彼女はアングリアの呪縛を脱したという視点にたち，シャーロットの初期作品のとくに後期の5作を分析している。

6）父ブロンテ師によるギャスケル夫人宛ての1855年7月30日付けの手紙。シャーロットが英雄の物語を好んで読んでいたことが，伝えられている。また 'An anecdotes of the duke of Wellington' (8.1829) では，父が所有していた Scott の *Life of Napoleon Bonaparte* (1827) から，ウェリントン公爵を賞賛した一節をそっくり引用している。

7）'Characters of the Celebrated Men of the Present Time', *EWCB*, vol.1, pp.123-4

8）'An Interesting Passage in the Lives of Some Eminent Men of the Present Time', *EWCB*, vol.1, p.288

9）'The Fresh Arrival', *EWCB*, vol.2, part 1: 1833-1834, p.247

10）シャーロット自身の教育観を示すものとしても興味深いので以下に紹介する。
I will nerve his frame in very childhood by bearing him to wild and distant mountains; I will humble his soul by constant and familiar intercourse with the lowest of mankind; I will teach him not to be ashamed of a ragged coat or to dread passing a night or two in the open streets exposed to rain and wind. Hunger, under my tuition, will initiate him into the secret of beings as well satisfied with a crust of coarse brown bread and a draught of water partaken of in some roofless hovel as with all the dainties of his father's palace. *Ibid.*, p.250

11）Fannie E. Ratchford, *The Brontë's Web of Childhood*, New York: Columbia University Press, 1941 p.71

12）'Characters of the Celebrated Men of the Present Time', *EWCB*, vol.1, pp.124-25

13）'A Leaf from an Unopened Volume', *EWCB*, vol,1, p.361

14）'High Life in Verdopolis', *EWCB*, vol.2, part 2: 1834-1835. p.4

15）'A Peep into a Picture Book', *EWCB*, vol.2, part 2, pp.92-93

16）'The Spell', *EWCB*, vol.2, part 2, p.237

17）Winifred Gérin, *Charlotte Brontë: The Evolution of Genius*, Oxford University Press, 1967 pp.89-91

18）John Maynard, *Charlotte Brontë and Sexuality*, Cambridge University Press, 1984 'Purged of his excessively *maudit* qualities, Byron as Zamorna provided stimulation for increasingly mature sexual feelings and imaginations. The outlet

was in the first instance the teenage writing and the novelettes of early adulthood. Ultimately the culture of passions and sexual experience that Brontë inherited through her reading provided at least the outlines for the greater psychological explanation of the mature novels, though in a more realistic and at the same time more censored format.' p.12

19) 'Julia', Winifred Gérin ed., *Five Novelettes*, London: Folio Press, 1971 (以下 *FN* と略記) p.113

20) 'Mina Laury', *FN*, *op. cit.*, p.138

21) *Ibid.*, p.165

22) 'Caroline Vernon', *FN*. pp.351-2

23) *Ibid.*, p.353

24) *Ibid.*, p.351

25) ブランウェルがなぜ悪役のノーザンガーランド伯爵を主人公として使い続けたかは興味深い問題である。ダフネ・デュ・モーリエはその著 *The Infernal World of Branwell Brontë* (Victor Gollanz, 1960 rept. Penguin, 1987) において，ブランウェルの二面性——自分の才能に対する自信に溢れ，周囲の期待に応えようとする瀲剌とした青年の姿と，そのいっぽう臆病で，懐疑的で，自信喪失に悩まされ，逃避傾向をもつ不安な青年の姿——を描き出している。その上でブランウェルが家族の期待を裏切った罪悪感や父に対する反発などを，バイロン的な暗い罪悪感をもつノーザンガーランド伯爵に投影し，彼をペルソナとして生きることによって現実の苦悩からの解放を求めたと考察している。

26) 'Characters of the Celebrated Men of the Present Time', *EWCB*, vol.1, p.128

27) 'The Green Dwarf', *EWCB*, vol.2, part 1, p.146

28) 'Captain Henry Hastings', *FN*, *op.cit.*, pp.227-8

29) 'A Peep into a Picture Book', *EWCB*, vol.2, part 2, p.87

30) 'A Day Abroad', *EWCB*, vol.2, part 2, p.132

31) Laura Hinkley, *The Brontë: Charlotte and Emily*, London: Hammond, Hammond & Co. 1947 p.22

32) 'High Life in Verdopolis', *EWCB*, vol.2, part 2. p.33

33) 'My Angria and Angrians', T. J. Wise & J. A. Symington, eds. *The Miscellaneous and Unpublished Writings of Charlotte and Patrick Brontë*, The Shakespeare Head Brontë, 2 vols: 1 (1936) and 2 (1938), Oxford: Basil Blackwell, vol.2, p.30

34) 'Passing Events' *FN*. p.68

35) ブランウェルは *Blackwood's Magazine* の編集長に宛て1835年11月21日，12月7日および36年4月8日の三回にわたって手紙を書いている。またワーズワースへは1837年1月19日に手紙を送ったが，返事をもらった形跡はない。なおシャーロットのサウジーへの手紙については本文で後述する。

36) Elizabeth C. Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, 3rd ed., 'revised and corrected', (London: Smith & Elder, 1857), vol.1, p.113

37) The Brontës: *Their Lives, Friendships & Correspondence*, The Shakespeare Head Brontë (rept. Porcupine Press, 1980) vol.1, p.139

38) *Ibid*, vol.1, p.155

39) Karen Chase, *Eros and Psyche: The Representation of Personality in Charlotte Brontë, Charles Dickens, George Eliot*, Methuen, 1984 p.23